ふて居る。ところで面白いことにはこれを受けた天子の順帝自身も、やはり漢文は讀めなかつた人で、漢籍は翻譯を經て解して居つた人である。漢文の讀めない天子に漢文の讀めない者が總裁になつてこれ等の書を編纂して上つた次第である。天子や大臣のみならず、地方の官吏で直接民政に携はつて居つた官吏にも漢文の心得のない者が多くて、或る蒙古人の役人の如きは、文書の日附に七といふ字を書かなければならぬ時にその字がわからず七の字の曲りを逆にして丁の形に書いてしまつたといふ話も殘つて居る。それで天子の詔勅なども元朝で拵へた國字、即ち八思巴字とも稱せらるゝ文字で書くのが常であつたが、それだけでは分らないのでそれに漢字が添へられた。蒙古語で書いたものをその儘に支那の言葉に直譯して、それをまた蒙古字で書いて、且つ漢字を添へたものである、それを普通に俗語體の詔勅といふて居るが、必ずしも俗語體といふ名が當るものではない、寧ろ蒙古語の直譯體といふべきもので甚だ珍妙な形である。これ等のことについては近く私の書きましたのもありますから、茲で細かく申すことは避けますが、兎に角元代に於ては支那文明の上に蒙古の色彩が非常に強く加はつたもので、蒙古人は外の朝廷と違つて漢文明を受入れなかつたものと言つても差支ない、尤も斯ういふことはすべて概括的に見てのことであつて、中には蒙古人でも漢文に達したものがないことはない、併しそれは多くの數の中に於ける少數の例外ともいふべきであつて、その例外を以て事を論ずることは出來ない、大勢の上から申しますれば清朝などゝは全く相反する程に初めから終りまで支那文明に同化しない態度を執つて居つたのである。言ひ換へれば支那文明を尊崇しない態度を執つて居つたといふて差支ないのであります。これについて屢々例に引かれることでありますが、南宋の遺臣鄭所南といふ人の書いたといふ心史といふ書には、元初の社會に於ける職業の種類を高下の順に從つて一から